令和４年度

# 研 究 紀 要

【研究主題】

自己の在り方や生き方を主体的に考えることのできるキャリア教育の実践
～４つの㊙を意識させた授業づくりを通して～

千葉市立緑町中学校

# 目　　　次

◇　はじめに　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

◇　研究・研修の概要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

◇　教科の研究

◆　国　語　科　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　6

◆　社　会　科　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　8

◆　数　学　科　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１０

◆　理　　　科　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１２

◆　音　楽　科　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１４

◆　美　術　科　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１６

◆　保健体育科　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１８

◆　技術・家庭科　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２０

◆　英　語　科　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２２

◆　特別の教科　道徳　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２４

◆　特 別 活 動　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２６

◆　総合的な学習の時間　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２８

◇　おわりに　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　３０

◇　ご指導いただいた講師の方々・研究同人　・・・・・・・・・・　３１

# は じ め に

校 長　　滝 口 健 二

新学習指導要領が全面実施となり２年目が終わろうとしています。「生きる力」をはぐくむために、学校教育を通して育成すべき資質・能力を「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の３つの柱として整理し、授業においては「主体的・対話的で深い学び」の実践がいよいよ本格化してまいりました。また、教育活動の質を向上させ、学習の効果を最大限に引き出すために、地域・家庭と連携・協働するカリキュラム・マネジメントも動き出しています。さらに学習タブレットを活用した授業展開も各学校で工夫され研究が進んできたところでもあります。

本校は令和２年度～３年度に千葉市教育委員会指定でキャリア教育について研究を推進してまいりました。新学習指導要領には、生徒が、学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要としつつ各教科等の特質に応じて充実を図ること、とされています。自己の在り方や生き方を主体的に考えることのできるキャリア教育の在り方についての研究成果を生かし、令和４年度もキャリア教育を軸に各教科等で日々の学習活動を行う実践を積み重ねてまいりました。そうした実践を通して自己の在り方、生き方についての意識の変容を目指してきましたがキャリア教育という一朝一夕には結果となって表れにくい分野だけに十分満足の得られる研究となったかどうかは検証の難しいところではございます。しかしながら学習活動や行事等を通して生徒の成長を少しばかりではありますが促進できたものと感じております。

研究内容につきましては、まだまだ追及していかねばならない課題は尽きませんが、本年度の研究の成果を一通りまとめることができましたので、ご一読していただき、忌憚のないご意見を賜ることができれば幸いです。

新型コロナウイルスの収束はなかなか見えないところですが、職員一同協力して地域や保護者に信頼される学校づくりを目指し、歩みを止めることなく、日々の研究・研修を積み重ねて参りますので、今後とも更なるご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

令和４年度　千葉市立緑町中学校

# 研究紀要

## １　研究の概要

(1) 校訓（求める生徒像）

| 自主 | 寛容 | 錬磨 |
|---|---|---|
| ・見通しを持って主体的に学習する生徒<br>・自ら考え、正しく判断し、実践する生徒 | ・豊かな心を持ち、相手を思いやる心優しい生徒<br>・美しいもの、崇高なものに感動する感性の高い生徒 | ・明るく健康で、体力の向上に努める生徒<br>・困難に立ち向かい、自らの力で克服しようとする生徒 |

(2) 学校教育目標

心身ともに健康で、自主・自律の精神や豊かな創造性と実践力を持つ生徒の育成

(3) 研究主題

**自己の在り方や生き方を主体的に考えることのできるキャリア教育の実践**

**～４つのみを意識させた授業づくりを通して～**

(4) 研究の目的

**各教科等の授業を通して、キャリア教育における基礎的・汎用的能力を意識させた学習を行うことにより、生徒が自己の在り方や生き方を主体的に考えられるようになることを明らかにする。**

【キャリア教育における基礎的・汎用的能力（緑町中「４つのみ」）】

- 人間関係形成・社会形成能力　みとめあう力
- 課題対応能力　みいだす力
- 自己理解・自己管理能力　みつめる力
- キャリアプランニング能力　みとおす力

○教　　科・・・将来、社会でどのように役立つのか、学習の意義・目的をしっかり理解させ、地道に取り組む力を育てる。

○特別活動・・・より良い生活や人間関係を築くための活動を通して、人間としての生き方についての自覚を深めさせる。

○総合的な学習の時間・・・探究的な学習を通して、職業や自己の将来に関する学習活動を行う。

○学校行事・・・ポートフォリオによって事前・事後の考えを明らかにすることで、自らの活動に対する関わり方を振り返らせる。

## ２ 研究の内容

本研究を行うにあたり、２つの仮説を立てた。

【仮説１】

| |
|---|
| 教師が各教科等の授業において、キャリア教育を通して育てる基礎的・汎用的能力を明確に捉えて指導を行い、生徒が自己の在り方や生き方を主体的に考えることができ、社会的・職業的自立に必要な資質・能力を育成することができるだろう。 |

仮説１を解明するためには、教師が各教科でキャリア教育を通して身に付けさせたい基礎的・汎用的能力（４つの�み）は何かを整理し、身に付けさせるための手立てについて各教科等部会を通して共通理解を図る必要がある。また、各教科等の授業において、その身に付けさせたい能力を生徒にも同様に示す必要がある。

本校生徒のキャリア教育における実態を把握するために、昨年度３月に引き続き、文部科学省から出された「中学校キャリア教育の手引き」を参考にし、キャリア教育における基礎的・汎用的能力（人間関係形成・社会形成能力、自己理解・自己管理能力、課題解決能力、キャリアプランニング能力）に関して各３項目ずつ、計12項目の調査を行う。【資料３】それをもとに、各教科等で身に付けさせる能力を整理し、研究を進めていく。【資料１】今年度１月に再度意識調査を行い、実態を把握する。

【仮説２】

| |
|---|
| 生徒が中学校におけるキャリア教育の目標を明確に捉えて各教科等の授業に取り組めば、自己の在り方や生き方を主体的に考えるようになり、各教科等の学習に意欲的に取り組むことができるだろう。 |

仮説２を解明するためには、生徒が各活動において目的を明確にすることが必要である。そのために、行事に関しては、特別活動・総合的な学習の時間・キャリア教育の各部会で行事を分担し、行事毎に事前と事後の取組に対しての意識の変容を見ることのできるワークシートを作成する。【資料２】生徒は、作成した資料をもとにして、目的をもって行事に取り組むことができると考える。また、ワークシートはキャリアパスポートとして蓄積をしていく。各教科においては、教師が授業における目標を生徒に明確に伝えることを意識し、授業を行う。仮説１と同様に、意識調査を行うことで、実態を把握する。

【資料１】今年度の各教科等における研究主題と身に付けさせたい基礎的・汎用的能力

| 各教科等 | 研究主題 | 身に付けさせたい基礎的・汎用的能力 |
|---|---|---|
| 国語 | 「考えの形成」を促すための指導の工夫～思考の視覚化を通して～ | 自己理解・自己管理能力 |
| 社会 | 社会参加に向けた基礎的な資質・能力を高める指導法の工夫 | 人間関係形成・社会形成能力 |
| 数学 | 数学的な見方・考え方を育成する指導の工夫～数学的な活動を通して～ | 課題対応能力 |
| 理科 | 論理的な思考力・判断力・表現力の育成を目指した授業の工夫 | 課題対応能力 |
| 音楽 | 音楽の良さを感じ取り、主体的に取り組む生徒の育成～4つの基礎的・汎用的能力の向上を目指して～ | 人間関係形成・社会形成能力<br>課題対応能力 |
| 美術 | 多様な考えや価値を認め合い、より深く作品の良さ、美しさを感じ味わう鑑賞教育の工夫 | 人間関係形成・社会形成能力 |
| 保健体育 | 一人一人が健康の保持増進のための実践力を高める授業づくり～課題対応能力の向上を目指して～ | 課題対応能力 |
| 技術・家庭 | 技術・家庭科におけるキャリア教育の在り方～協働活動を通した課題対応能力の育成～ | 課題対応能力 |
| 外国語 | キャリアプランニング能力の向上を図る言語活動の工夫～ライティング活動を通して～ | キャリアプランニング能力 |

| | | |
|---|---|---|
| 特別の教科の道徳 | 自己を見つめ、他人を理解し、将来を見通した道徳的実践力の育成 | 人間関係形成・社会形成能力<br>自己理解・自己管理能力<br>キャリアプランニング能力 |
| 特　別　活　動 | 主体的に社会における自己の在り方を考えられる生徒の育成～「自己理解・自己管理能力」と「課題対応能力」の向上を目指して～ | 自己理解・自己管理能力<br>課題対応能力 |
| 総合的な学習の時間 | 体験学習を通じて思考力・判断力・表現力を養い、見通しをもって探究的に課題解決に臨む生徒の育成 | 課題対応能力<br>キャリアプランニング能力 |

【資料２】今年度ワークシートを作成して行う学校行事（キャリアパスポートとして蓄積する。）

・合唱コンクール…合唱コンクールへ向けての思いや練習に対する取組を、事前と事後で振り返ることで、自らが学級に対してどのような立場で関わるべきかを考えさせる。
・一学年校外学習…班別学習では探求課題について仮説を立て、校外学習を通して実証することを目的とした課題解決学習を行う。また、働いている人へのインタビューも行い、職業に対しての意識を高めさせる。
・一学年職業学習…企業の担当者から会社の概要や働くことについての講話を聞き、キャリア教育との関連を考えさせ、将来働くために必要な力を身に付けさせる。
・二学年職業学習…企業の担当者が、生徒に対し会社の概要や働くことについて話をし、キャリア教育における基礎的・汎用的能力を意識した体験学習を通して、将来働くために必要な力を身に付けさせる。
・立　志　式…自らの将来について考えた上で、自分の思いを「決意の言葉」に表す。「決意の言葉」を書に表し、学年全員の前で思いを誓わせ、互いに認め合わせる。

### ３ 研究の成果と今後の課題

キャリア教育における基礎的・汎用的能力毎に調査を行ったところ、次のことがわかった。各能力に対して、概ね８割以上の生徒が「いつもしている」と「時々している」という肯定的な考えをもち、日頃から実践していることがわかり、12の質問項目のうち９つが向上した。特に「人間関係形成・社会形成能力（みとめあう力）」についての質問１～３では、肯定的な考えをもつ生徒がすべて95％を超え、平均して97％と高い結果が確認できた。さらに「キャリアプランニング能力（みとおす力）」についての質問10～12においても、肯定的な考えをもつ生徒が初めてすべての項目で上昇傾向を示し、他の能力と比べると平均値は低いものの、平均して82％という結果となった。一方で、さらに細かく分析すると、上で述べた「キャリアプランニング能力（みとおす力）」に加えて、「自己理解・自己管理能力（みつめる力）」についての質問４～６の項目で肯定的な考えをもつ生徒が少ないことがわかった。[資料３]どちらの基礎的・汎用的能力にしても、総じて自分自身について見つめ直したり、その後見通しをもって考えたりする力が不足していることが主な課題として挙げられる。

来年度の研究では、生徒が現状の自分と向き合い、自分の強みや不足している能力を分析、把握し、自分がすべきことに自ら進んで取り組もうとする態度を育てる必要がある。そのためにも、引き続き自分の将来について明確に考え、具体的な目標と実現のための方法を考えさせる必要があるだろう。

【資料３】生徒に行った意識調査の内容と結果

質問１．友だちや家の人の意見を聞く時、その人の考えや気持ちを受け止めようとしているか。

| | いつもしている | 時々している | あまりしていない | ほとんどしていない |
|---|---|---|---|---|
| 10月 | 69．1% | 29．7% | 0．5% | 0．7% |
| １月 | 70．3% | 28．6% | 1．1% | 0．0% |

質問２．相手が理解しやすいように工夫しながら、自分の考えや気持ちを伝えようとしているか。

| | いつもしている | 時々している | あまりしていない | ほとんどしていない |
|---|---|---|---|---|
| 10月 | 53．4% | 41．3% | 5．1% | 0．2% |
| １月 | 53．0% | 43．3% | 3．7% | 0．0% |

質問３．自分から役割や仕事を見つけたり、分担したりしながら、周囲と力を合わせて行動しようとしているか。

| | いつもしている | 時々している | あまりしていない | ほとんどしていない |
|---|---|---|---|---|
| 10月 | 63．5% | 32．4% | 3．7% | 0．4% |
| １月 | 58．6% | 37．7% | 3．4% | 0．3% |

質問４．自分の興味や関心、長所や短所などについて、把握しようとしているか。

| | いつもしている | 時々している | あまりしていない | ほとんどしていない |
|---|---|---|---|---|
| 10月 | 51．5% | 40．0% | 7．1% | 1．4% |
| １月 | 52．1% | 38．6% | 8．2% | 1．1% |

質問５．気持ちが沈んでいる時や、あまりやる気が起きない物事に対する時でも、自分がすべきことには取り組もうとしているか。

| | いつもしている | 時々している | あまりしていない | ほとんどしていない |
|---|---|---|---|---|
| 10月 | 33．3% | 50．5% | 14．5% | 1．7% |
| １月 | 33．1% | 47．4% | 16．1% | 3．4% |

質問６．不得意なことや苦手なことでも、自ら進んで取り組もうとしているか。

| | いつもしている | 時々している | あまりしていない | ほとんどしていない |
|---|---|---|---|---|
| 10月 | 27．9% | 52．9% | 17．6% | 1．6% |
| １月 | 25．8% | 55．2% | 17．0% | 2．0% |

質問７．分からないことやもっと知りたいことがある時、自分から進んで資料や情報を収集したり、誰かに質問をしたりしているか。

| | いつもしている | 時々している | あまりしていない | ほとんどしていない |
|---|---|---|---|---|
| 10月 | 43．1% | 45．1% | 10．5% | 1．3% |
| １月 | 41．1% | 44．8% | 12．7% | 1．4% |

質問８．何か問題が起きた時、次に同じような問題が起こらないようにするために、何をすればよいか考えているか。

| | いつもしている | 時々している | あまりしていない | ほとんどしていない |
|---|---|---|---|---|
| 10月 | 51．5% | 43．4% | 4．9% | 0．2% |
| １月 | 54．1% | 41．9% | 3．7% | 0．3% |

質問９．何かをする時、見通しをもって計画的に進めたり、そのやり方などについて改善を図ったりしているか。

| | いつもしている | 時々している | あまりしていない | ほとんどしていない |
|---|---|---|---|---|
| 10月 | 34．6% | 49．3% | 13．5% | 2．6% |
| １月 | 35．4% | 51．9% | 11．6% | 1．1% |

質問10．学ぶことや働くことの意義について考えたり、今学校で学んでいることと自分の将来とのつながりを考えたりしているか。

| | いつもしている | 時々している | あまりしていない | ほとんどしていない |
|---|---|---|---|---|
| 10月 | 37．5% | 46．3% | 13．2% | 3．0% |
| １月 | 36．3% | 48．7% | 13．9% | 1．1% |

質問11．自分の将来について具体的な目標をたて、その実現のための方法について考えているか。

| | いつもしている | 時々している | あまりしていない | ほとんどしていない |
|---|---|---|---|---|
| 10月 | 33．1% | 42．2% | 17．6% | 7．1% |
| １月 | 33．1% | 43．4% | 18．4% | 5．1% |

質問12．自分の将来の目標に向かって努力したり、生活や勉強の仕方を工夫したりしているか。

| | いつもしている | 時々している | あまりしていない | ほとんどしていない |
|---|---|---|---|---|
| 10月 | 41．2% | 41．2% | 14．7% | 2．9% |
| １月 | 38．2% | 45．3% | 14．2% | 2．3% |

# 国語科

## １　教科研究主題

「考えの形成」を促すための指導の工夫

～思考の視覚化を通して～

## ２　主題について

(1) 全体研究主題（キャリア教育）との関連から

学習指導要領では、自分の考えを形成する学習過程が重視され、全ての領域において「考えの形成」に関する指導事項が位置付けられている。文章から読み取ったことを基に考えを形成するためには、読み取った情報と知識等を関連付けたり、言葉の意味を多面的・多角的に吟味したりする力が必要である。学習過程を工夫し、思考の視覚化を取り入れた学習を行えば生徒が必要な情報を正確に読み取り、根拠を明確にして自分の考えを形成する力を高めることができるのではないかと考え、研究主題を設定した。自分の思いや考えを形成し、深めることはキャリア教育における「みつめる力（自己理解・自己管理能力）」の育成につながっていくと考える。

(2) 生徒の実態

令和４年度全国学力・学習状況調査においての平均正答率は 75％と全国平均を６％ほど上回っている。また、「国語の学習は大切だと思いますか。」という質問に対しての肯定的な回答は91.4％であり、「国語の学習で学んだことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか。」という質問に対しての肯定的な回答は 87.1％であった。このように、国語の学習に対して前向きに取り組む生徒が多い。その一方で、昨年度１月の実態調査では「自分の考えを他の人に説明したり、文章に書いたりすることは難しいと思う。」という項目に対して 93％が難しさを感じると回答していた。文章を正確に理解することに加えて、生徒たちが自ら進んで触れることのない種類の文章でも、その内容を身近な話題として捉えられる工夫をしていく必要がある。そして、様々な話題に触れ、それぞれに対して自らの考えをもてるような指導の工夫を行っていきたい。

## ３　研究の目標

(1) 学習内容を生徒が身近な話題として捉えられるように、題材等を工夫することで、生徒一人一人が学習課題に沿った自らの考えをもつことを目的とする。

(2)文章から読み取った筆者の考えや、課題に対する自分の考えを視覚的に整理しやすくすることが生徒一人一人の考えの形成を促すことを明らかにする。

## ４　研究内容

(1) 研究の目標(1)に関して

学習内容を身近な話題として捉えられるように、必要に応じて題材に関連した補助資料を提供するなどして、学習課題に沿った自分の考えをもてるようにする。

(2) 研究の目標(2)に関して

場面や目的に応じた思考ツールや表現ツールを提示する。また、タブレットを活用し、自分の考えを広げたり深めたりできるような交流の場を設定する。

## ５　研究の実践

(1) 単元名

「これからの時代に大切なことを考える　～二つの文章を比較して読み、自分の考えをもつ～」（第３学年）

(2) 単元について

「人工知能との未来／人間と人工知能と創造性」（第三学年）を教材とし、「これからの時代に大切なことを考える　～二つの文章を比較して読み、自分の考えをもつ～」という単元を設定した。本

単元は「文章を批判的に読みながら、文章に表れているものの見方や考え方について考えることができる」及び「文章を読んで考えを広げたり深めたりして、人間、社会、自然などについて、自分の意見をもつことができる」力を伸ばすことを目的とし、「これからの時代に大切なことを考える」という言語活動を設定した。人工知能に対して、二人の筆者それぞれの身近な視点から書かれた文章を観点ごとに比較して読み取っていく。その上で、それぞれの筆者の意見やグループでの話を基に、生徒自身もこれからの社会を想像し、自分の生活とのつながりの中で人工知能との付き合い方に対する自分の考えをもつことをねらいとする。

(3) 学習の実際

二つの文章の比較検討時にはタブレットの発表ノートを一観点１ページとして、二つの文章についての記入欄を色分けし、直感的に区別しやすくして個人に配付した。まずは個人で二つの文章を比較し、その後、グループで話し合う形をとった。発表ノートをグループワークとして共同編集するか、他者が発表したことを自分で入力するかはグループごとに判断を任せた。各グループで、どちらが自分たちにとってよりよい手段となるかを相談して決めている様子が見られた。グループでの話し合い後には全体で二つの文章について確認し、改めて個人でこれからの時代を予想し、「これからの時代に大切なこと」について文章にまとめる活動を行った。

授業後の生徒の感想では、「観点ごとにまとめることで、共通している部分と異なっている部分を明確にできた。」や「自分が気付かなった二人の筆者の立場の違いに話し合いの中で気付くことができた」、「二つの文章は違いがわかりやすいものではなかったが、グループで話し合うことでより文への理解がしやすかった」という記述がみられた。

(4) 実践のまとめ

今回の授業では、筆者の立場や事例、考えなどを視覚的にも比較しやすくなるように発表ノートを使用した。ページ内を色分けしたり、観点ごとにページを区切ったりしたことは、内容の整理・確認には有効であった。また、他の学習者のノートを閲覧できる設定にしたことで、自分の考えをまとめる際に自分のグループのノートを確認するだけでなく、他グループのノートと比較している様子も見られた。

## ６　研究のまとめ

(1) 成果

「自分の考えを他の人に説明したり、文章に書いたりすることは難しいと思う。」という項目に対して、難しさを感じるとの回答が昨年度１月の93%から、今年度１月の調査では 82.3%に減少した。生徒にとって身近な話題を扱ったり、より関心をもちやすい課題を設定したりすることで、課題に沿った自らの考えを形成しようとする姿勢を引き出すことができたと考えられる。さらに、今年度１月の調査では「国語の学習では、単元ごとに自分の考えをもつことができた。」という質問に対して 86.8%の生徒が肯定的な回答をしている。検証授業後の振り返りでは、「色々な人が様々な意見をもっているので、どの意見が正しいかではなく、どういう考えなのかを比較しながら読み取り、自分の意見を考えいてきたい。」など、自分自身が考えをもつことに前向きな記述が多く見られた。考えの形成を意識した学習課題や言語活動を継続して設定したことにより、生徒自身も「自分の考えをもつ」ことを意識して学習に取り組むことができたと考える。

(2) 課題

昨年度から継続して「自分はどう考えるか」を常に意識させたことは生徒の主体的な読みにつながっていると考えられる。しかし、グループでの話し合いや討論の際は活発に意見を述べている生徒が、自分の考えを文章に書く活動になると思うように進まない姿も見られた。今後は自分の考えを、「話すこと」だけでなく、「書くこと」につなげるための知識・技能の定着を目指し、授業の工夫改善を図っていきたい。

# 社会科

## １　教科研究主題

社会参加に向けた基礎的な資質・能力を高める指導法の工夫

## ２　主題について

(1) 全体研究主題（キャリア教育）との関連から

中学校社会科では、「社会的な見方・考え方を働かせ、グローバル化する国際社会に主体的にかかわる資質・能力を育成する」ことを目標としている。日本では 2009 年に裁判員制度が始まり、2015 年には選挙権の年齢が 18 歳に引き下げられた。2020 年には改正民法の施行により成人年齢が引き下げられ、将来そう遠くないうちに社会参加する機会がやってくるため、社会参加に向けてコミュニケーション能力や思考力などの、基礎的な資質・能力を育成することが重要であり、主体的に自己の在り方や生き方を考えることにつながると考える。以上のことから、本校社会科では、生徒の人間関係形成・社会形成能力の育成に重点を置くことにした。

(2) 生徒の実態

本校生徒は与えられた課題に意欲的に取り組み、知識も豊富である。授業内の発表では、知識を問う質問には積極的に答えるが、理由や原因を問う質問にはやや消極的になる様子も見られる。しかし、話合い活動では活発に議論が行われ、深まりのある授業展開が可能である。また、今年度の５月に実施した実態調査から、「自分の意見や考えを人に伝えることが得意だ」の項目に「あてはまる」と回答した生徒が 18%、「自分にも社会（世の中）のためにできることがあると思う」の項目に「あてはまる」と回答した生徒が 50%と、世の中のために何かができると考えつつも、自分の意思を表明することを苦手とする生徒が多いことが伺えた。

## ３　研究の目標

(1) 生徒が意見交換を通じて考えを深めることで、生徒一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要となる基礎的な能力や態度が養われることを明らかにする。

(2) 生徒の実生活を題材とした学習活動を行うことで、主体的に世の中の出来事に関わろうとする公民的資質が養われることを明らかにする。

(3) 思考の整理の道筋を示すことで、思考力が養われることを明らかにする。

## ４　研究内容

(1) 研究の目標(1)に関して

社会的・職業的な自立のために必要な能力・態度として、思考力とコミュニケーション力が挙げられる。そのため話合い活動をする際に、まずは自分の意見をノートやプリントに書くことで自分の考えを明確にさせる。その後、他者との意見交換を行った後に自分の意見を再構築させる。

(2) 研究の目標(2)に関して

世の中の出来事に関心をもたせ、主体的に関わろうとする態度を養うために、学習内容を生徒の実生活にフィードバックしたり、シミュレーションを用いた授業を展開したりする。

(3) 研究の目標(3)に関して

単元の振り返りプリントを用い、授業ごとのまとめや単元を貫く課題に対する自分の考えを記入させる。

## ５　研究の実践

(1) 単元名「日本の地域的特色と地域区分」

(2) 単元について

本単元は、学習指導要領地理的分野の「C　日本の様々な地域」における「（２）日本の地域的特色と地域区分」に基づき、自然環境や人口、資源・エネルギーと産業、交通・通信の面から日本の地域的特色を理解させることをねらいとして

いる。

太平洋地域の変動帯上に位置する日本列島では、陸地のおよそ４分の３が山地と丘陵からなり、気候は日本を取り巻く４つの気団の影響で四季の変化が明瞭であるが、地域によってその気候の特徴は大きく異なっている。そのような自然環境のもと、人口の偏りが生まれ、エネルギーの供給や産業、交通の面で地域的な特色が見られるようになった。本時では地域ごとの日本の気候について扱い、画像を使ってその地域のイメージを膨らませることで、後に続く人口、資源・エネルギー、産業、交通・通信の地域ごとの特色を考える基礎を身に付けさせることをねらいとする。

(3) 学習の実際

タブレットに用意した日本の気候のスライド６枚に、その気候の特徴を表す画像を添付させた。生徒は「風景」や「動物」などのテーマを決めて画像を探したが、北海道と沖縄の気候以外では独自性がある画像を見つけることに苦戦していた。それぞれの気候の特徴を理解できている生徒は、「瀬戸内は乾燥しているからレモン」「日本海側は湿地が多いから稲作」と、根拠に基づいて発表していた。

【資料１】風景をテーマにした生徒のスライド

(4) 実践のまとめ

本実践で日本の各地域のイメージを膨らませたため、その後の単元の日本の諸地域の学習では、どのような作物を育てているかという問いなどに対して的確に答える生徒が多かった。日本の諸地域の学習が終わった後に、振り返りとして本授業を行っても有効と考えられる。

発表の際は、タブレットで作成したスライドによる発表をさせたが、タブレットなどのＩＣＴ機器を用いた意見表明の機会がこれからの世の中で増えてくることを考えると、タブレット上でスライドを共有し、発表しない生徒のスライドも互いに見られるようにしても良かったかもしれない。

【資料２】動物をテーマにした生徒のスライド

## ６　研究のまとめ

(1) 成果

タブレットが導入されて２年が経過し、基本的な操作方法が生徒に身に付いてきた。話合い活動に代わる意見表明の手段として活用することも多く、その匿名性から生徒は共有への抵抗感なく意見を表明している。

１月に実施した実態調査では、「自分の意見や考えを人に伝えることが得意だ」の項目に「あてはまる」と回答した生徒が 20%（２%増)、「自分にも社会（世の中）のためにできることがあると思う」の項目が 52%（２%増）と、５月の実態調査と比べてわずかながらに上昇した。このことから、社会参加に向けた意識・技能が上昇したと言える。

(2) 課題

タブレットを利用する機会が増えたが、その一方でタブレットを使わずに授業を進めたほうが良い場面もあった。タブレット内に作成したワークシートを生徒に記述させるだけの活動では、紙媒体で行う活動と何ら変わりはないため、タブレットの適切なタイミングでの有効活用を考えていかなければならない。

また、今年度行った実態調査ではどの項目も微増に留まったため、生徒が自分の活動や意見に対して自信をもてるような授業展開を心がけていく必要がある。

# 数学科

## １　教科研究主題

### 数学的な見方・考え方を育成する指導の工夫

～　数学的な活動を通して　～

## ２　主題について

(1) 全体研究主題（キャリア教育）との関連から

『中学校キャリア教育の手引き』によると、課題対応能力とは、以下のように示されている。

> 「課題対応能力」は、仕事をする上での様々な課題を発見・分析し，適切な計画を立ててその課題を処理し，解決することができる力である。この能力は，自らが行うべきことに意欲的に取り組む上で必要なものである。～中略～社会の情報化に伴い，情報及び情報手段を主体的に選択し活用する力を身に付けることも重要である。具体的な要素としては，情報の理解・選択・処理等，本質の理解，原因の追究，課題発見，計画立案，実行力，評価・改善等が挙げられる。

つまり、学習計画を自ら立て、数学的な活動を通して、学習計画を見直しながら、情報を理解・選択・処理する中で、数学的な見方・考え方を働かせられれば、課題対応能力の育成に繋がることがわかる。

(2) 生徒の実態

「計画を立てたり、見通しをもったりして勉強に取り組むほうだ」という質問に対する肯定的な回答は 46%であった。また、「自分なりに工夫して、勉強の計画を立てるようにしている」という質問に対する肯定的な回答は 57%であった。これらの回答から、計画を立てる機会があるのは、テスト計画を立てる程度であり、多くの生徒が計画を立案し学習していないことがわかる。つまり、通常授業では、教師が本時の目標を設定し、教師主体の授業が展開されていることがわかる。これらの結果を受け、これまでの教師主体の授業を改め、生徒が主体となって学習が進められるように、単元内自由進度学習を採用していこうと考えた。

## ３　研究の目標

(1) 単元内自由進度学習で学習を進めることで、主体的に学習に取り組むことができる。

(2) 確認テストや小テストの受験のタイミングを個人で設定させることで、数学的な見方・考え方を鍛え、資質・能力を育成することができる。

## ４　研究内容

(1) 研究の目標(1)に関して

先に述べたように、教師主導で授業が進められ受け身の状態で授業に取り組んでいる生徒が多い。自ら計画を立案し、それを実行する学習環境を作ることで、主体的に学習に取り組むことができるのではないかと考えた。具体的な学習環境として、不明点を教えてもらいに友人に聞きに行けるようにした。また、廊下では話してはいけないルールを設定し、静かな環境で学習したい生徒については、廊下で学習したりしても良いようにした。

(2) 研究の目標(2)に関して

これまで小テストは日付を設定して、一斉に受験するようにしていた。そのデメリットとして、他教科でも小テストや提出物が重なってしまうことがあり、どのような数学的な見方・考え方を働かせるべきかわからないままの生徒が少なからずいた。確認テストや小テストの受験のタイミングを個人で設定させることで、上記のデメリットが改善され、柔軟に受験日を再設定することできると考えた。また、生徒一人一人が納得した状態でテストを受験し、その結果得られた改善点を修正することが大切であると考えた。

## ５　研究の実践

(1) 単元名「図形と相似」

(2) 単元について

小学校算数科の第６学年では、図形についての観察や構成などの活動、拡大図や縮図の学習を通して、図形の拡大や縮小（二つの図形の形が相似であること）について理解してきている。また、中学校第２学年では、数学的な推論の過程に着目し、三角形や平行四辺形の基本的な性質を三角形の合同条件を用いて論理的に確かめ説明することを学習している。本単元では、これらの学習の上に立って、三角形や多角形などについて形が同じであることの意味をさらに明確にすることになる。三角形の相似条件などを用いて図形の性質を論理的に確かめ、数学的に推論することの必要性と意味及び方法の理解を深め、論理的に考察し表現する能力を伸ばすことを主なねらいとする。

(3) 学習の実際

図形と相似の単元の学習は、合計 18 時間で実施した。初回は単元内自由進度学習の説明と単元の概要説明を行った。２時間目の授業では、残りの 16 時間で学習を終えられるように、学習計画を立案させた。その中で、「既習の数学を基に解決する問題」、「数学的な表現を用いて根拠を明らかにし、筋道を立てて説明し合う問題」がどの問題に該当しているか明らかになっているプリントを、一人一台の端末を用いて配付し、数学的な活動が自然と生み出せるように設定した。その後、16 時間の中で単元の項を終えたら確認テストを、単元の節を終えたら小テストを受験しながら理解度を確認し、生徒自身に合った学習方法で取り組んでいた。

(4) 実践のまとめ

単元内自由進度学習を行うにあたって、生徒一人一人が学習計画を立案するが、その計画を大切にし計画通りに進めていこうとする生徒が多かったように感じる。特に、計画通りに進んでいない生徒については、家庭学習を行い、理解できなかった問題や考え方を、授業内で聞いている生徒がいた。そのため、教師が促しているわけではないが、反転学習が自然と行われているように感じた。

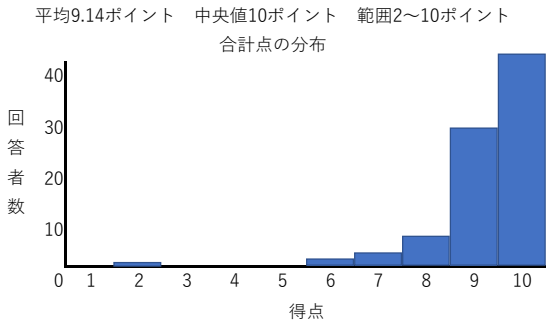
また、確認テストは成績に含まれず、小テストは１回目のテストの結果に満足できなければ、再度受験してもよいというルールがあるからか、テストを嫌がる生徒は少なく、楽しんでテストに臨んでいる生徒が多かったように感じる。

## ６　研究のまとめ

(1) 成果

単元内自由進度学習を終えてアンケートを実施した。「単元内自由進度学習が楽しかったですか」という質問に対し、肯定的な回答は 98%であった。その理由については、「自分のペースで学ぶことができたから。」や「先のことを進んで学習できたから」などが多かった。また、「これからも単元内自由進度学習をやりたいですか」という質問に対し、肯定的な回答は 100%であった。

小テストや確認テストは、自分のペースで受験ができるため、正答率が高い傾向にあったため、数学的な見方・考え方をうまく働かせることができていると考えられる。




[図 1]　相似の証明の確認テスト結果

(2) 課題

学習計画を立案させ、その中で確認テストと小テストを受験しなければならないノルマを設定したが、最後の授業でぎりぎりになって受験する生徒が各クラスに２,３名いた。そのような生徒は後半のテストの正答率が低い傾向にあったので、支援の方法を考えなければならない。また、数回行わなければ、計画を実行する力は付かないと感じたため、継続的に実施する必要があると考える。

# 理科

## １　教科研究主題

論理的な思考力・判断力・表現力の育成を目指した授業の工夫

## ２　主題について

(1) 全体研究主題（キャリア教育）との関連から

中学校学習指導要領（平成29年告示）解説によると、理科の目標は、「自然の事物・現象に関わり、理科の見方・考え方を働かせ、見通しをもって観察、実験を行うことを通して、自然の事物・現象を科学的に探究するための資質・能力を育成すること」とされている。これらの資質・能力を育むために、重視すべき探究の過程は、大きく３つに分かれる。

はじめに、課題を把握する過程である。この過程では、自然事象を観察し、必要な情報を抽出・整理する力や、抽出・整理した情報についての関係性や傾向を見いだす力を育成する。

次に、課題を探究する過程である。この過程では、見通しをもち、検証できる仮説を設定する力やそれを確かめるための観察・実験の計画を立案し、実行する力の育成を目指している。

最後に、課題を解決する過程である。この過程では、観察・実験の結果を分析・解釈する力や、新たな知識やモデル等を創造したり、次の課題を見いだしたりする力を育成する。

このような探求の過程を意識して、さまざまな分野の学習を進めることによって、全体研究主題の「４つのみ」の力の育成につながると考えた。

例えば、「見通す力」では、目的意識をもち、観察・実験の計画を立案する学習活動との関わりがある。また、実際に観察・実験を行う学習活動では、自然の事物・現象を見つめ、新たな知識を見いだそうとしている。

これらの「見通しをもち、検証できる仮説を設定する力」や「観察・実験の結果を分析・解釈する力」の向上と、論理的な思考力・判断力・表現力の育成は、深く関わっている。そこで、「思考力・判断力・表現力」を身に付けることで、キャリア教育の４つの基礎的・汎用的能力の向上につながると考えた。以上のことから、論理的な思考力・判断力・表現力の育成を目指した授業の工夫を研究することで、キャリア教育の４つの基礎的・汎用的能力の向上に大きく貢献し、生徒が「自己の在り方や生き方を主体的に考えられるようになる」ことを目指す。

(2) 生徒の実態

生徒にアンケートを行ったところ、「目的意識をもって実験に取り組んでいる」という質問に対し、肯定的な意見は 47%であった。また、「身近な現象から疑問や課題を発見しようとしている」という質問に対しては、肯定的な意見が 44%となった。

このような結果になった要因として、観察・実験の経験が少ないことが挙げられる。実際に、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、近年は、観察・実験を行わずに、演示実験を行う措置が取られていた時期もあった。

以上のことから、身近な現象から疑問や課題を発見する経験が少ないことから、自ら進んで課題を設定する学習活動を取り入れ、見通しをもち、観察・実験を行うように指導していきたい。さらに、既習事項を整理し、科学的根拠のある予想を立てる学習活動を行うことで、観察・実験の結果を分析・解釈する力や、新たな知識やモデル等を創造したり、次の課題を見いだしたりする力を育成したい。

## ３　研究の目標

(1) 自然の事物・現象から、疑問や課題を見いだす場面を設定することで、見通しをもって検証し、観察・実験の結果を分析・解釈する力を育成する。

(2) 予想を記述させることで、観察・実験の結果を分析・解釈する力を育成する。

## ４　研究内容

(1) 研究の目標(1)に関して

① 身近な現象から、疑問や課題を見いだす学習活動を取り入れた授業を展開する。

② 授業後に質問紙調査を行う。

③ 質問紙調査の結果を理科部会で検討する。

(2) 研究の目標(2)に関して

① 既習事項を整理して、科学的根拠を明確にした予想を立案させる学習活動を取り入れた授業を展開する。

② 授業後に質問紙調査を行う。

③ 生徒の予想と考察の記述と質問紙調査の結果を理科部会で検討する。

## 5 研究の実践

(1) 単元名「浮沈子の浮き沈み」

(2) 単元について

三年生の「浮力」と「水圧」の単元のまとめとして、「浮沈子が浮き沈みする理由を説明できるようになろう」を課題に設定し活動させた。

授業の導入で、ペットボトルと試験管からできている浮沈子を見せた。その後、「この現象がなぜ起こるのか？」と投げかけた。また、既習事項の確認として、パスカルの原理とアルキメデスの原理の復習を行った。各班に演示でつかった浮沈子とそれらの材料を渡し、班活動を行わせた。

(3) 学習の実際

班活動がはじまると、演示で使った浮沈子を握ったり放したりするなど、何が起きているのか確かめようとする姿が多く見られた。また、材料をもとに自分たちで浮沈子を作り、どんな工夫がされているのかを考える姿が見られた。

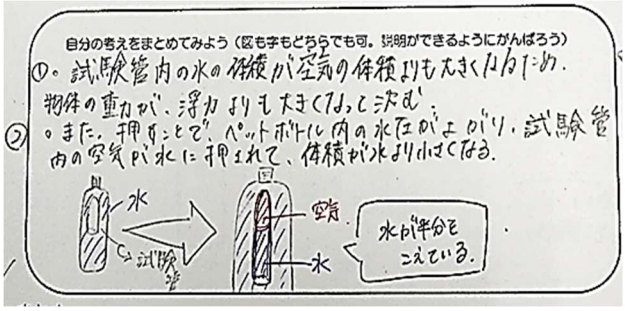
解決の糸口がわからない生徒もノートの記載を参考に、説明を記述しようとしていたことから、理解度にかかわらず、多くの生徒が主体的に活動できたことがわかった。

(4) 実践のまとめ

本実践では、身近な現象から、疑問や課題を見いだす学習活動を取り入れた授業を展開した。その結果、生徒が明確に課題をもって、授業に主体的に取り組むことができた。さらに、生徒の記述から、課題について、自分なりの考えを表現するなど、思考力・判断力・表現力を高めようとする姿が見られた。

よって、本実践では見通しをもって検証し、観察・実験の結果を分析・解釈する力を育成できた。

## 6 研究のまとめ




【図 生徒の考察の記述】

(1) 成果

① 研究の目標(1)に関して

質問紙調査の結果から、「疑問や課題を見いだす学習活動によって、実験の目的意識は高まったか」という質問に対し肯定的な意見は87%であった。また、考察を記述できる生徒が増加している。

このことから、見通しをもって検証し、観察・実験の結果を分析・解釈する力を育成できたといえる。

② 研究の目標(2)に関して

予想と考察を記述させる活動を取り入れた授業を定期的に展開した。予想と考察を５段階尺度で評価し、その推移を調査した。その結果、考察の評価について、５月と 11 月で、「４」、「５」の良い評価を得た生徒の割合が、15%から 23%に上昇した。

このことから、予想を記述させることで、観察・実験の結果を分析・解釈する力を育成できたといえる。

(2) 課題

① 研究の目標(1)に関して

導入で、扱う身近な現象によって生徒の反応が大きく変化することがわかったので、授業で取り扱う自然現象について、丁寧に検討する必要がある。

② 研究の目標(2)に関して

予想が低評価の生徒は、考察も低評価である場合が多かったので、記述が苦手な生徒への支援方法を考え、実施する必要がある。

# 音楽科

## １　教科研究主題

音楽の良さを感じ取り、主体的に取り組む生徒の育成

～４つの基礎的・汎用的能力の向上を目指して～

---

## ２　主題について

(1) 全体研究主題（キャリア教育）との関連から

学習指導要領の音楽科の目標に「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育成する」とある。それは、音楽的な見方・考え方を働かせた音楽科の学習を積み重ねることにより、その後の人生においても生きて働くものとなると考えられるからである。そこで、音楽学習に欠かせない他者と協力して取り組む「みとめあう力（人間関係形成・社会形成能力）」だけでなく、学習目標を理解し目標に近づくように努力する「みつめる力（自己理解・自己管理能力）」、課題にどのように取り組み、振り返りを通して改善していく「みいだす力（課題対応能力）」、到達目標を提示し練習計画を立てる「みとおす力（キャリアプランニング能力）」の４つを高めていこうと考えた。

(2) 生徒の実態

６月に行った事前調査では、「今、学んでいる内容は、あなたの生活を助ける力の一部になると思うか。」という質問では、85％の生徒が肯定的な回答をした。どんな助けになるかという選択肢をつけたアンケート（複数回答可）では、「趣味で音楽を楽しむときの基礎技術 81.9％」「曲を選ぶ時の基礎知識 51％」「曲を鑑賞するときのポイントがわかる 49％」の３項目が上位を占めた。何の役にも立たないと答えた生徒は 2.5％であった。このことから、音楽の知識や技能を習得するための学習が「音楽に対する感性」を働かせることにつながり、将来を通して音楽を愛好していく基盤となっていると考えている生徒が多くいると考えられる。

## ３　研究の目標

(1) 協働の音楽学習が主体的に取り組む生徒を育成する。

(2) 音楽的な見方・考え方を養うことが、曲のもつ良さをより感じ取ることにつながることを研究する。

## ４　研究内容

(1) 研究の目標(1)に関して

合唱や器楽演奏、創作の学習で、一つの音楽を作っていく活動の中に、表現したいイメージを伝え合ったり、協働する喜びを感じたりする場面を意図的に設けることで、生徒が主体的に取り組むことを検証する。

(2) 研究の目標(2)に関して

言葉や音楽で伝え合い、共有したり共感したりすることで、音楽を形づくっている要素や構成を理解し、音楽の良さをより感じ取ることができることを検証する。

## ５　研究の実践

(1) 題材名「リズムアンサンブルを作ろう」

(2) 題材について

現代の子供たちは、ゲームや SNS などに囲まれて育ち、さらにこの３年間はコロナ禍の影響によりコミュニケーション能力の基本となる体験活動が不足がちとなり、自ら考えたことを表現したり

創造したりする力が乏しくなっているように感じる。生徒にとっての音楽活動は、既存のものを聴き、表現することが多い。しかし、感性を育み、表現する力を身に付けるには、そこから学んだことを活かしながら、自らの思いや意図を反映させて音楽を生み出す経験を重ねることで深められるのではないかと考える。本題材は、音素材の特徴及び音の重なり方や反復、変化、対照などの構成上の特徴を理解しながら、言葉遊びの語感を活かしたリズムアンサンブルをつくる創作の学習である。言葉そのものがもつ語感をリズムで表すことで、身の回りにある音素材に気付くとともに、発声や発音で生み出される音色の特徴やそれらの重なり方の違いや構成上の特徴を学習し、グループによる創作活動を行うことで、主体的・協働的な学習が展開できるようにしたい。

(3) 学習の実際

本題材は３時間で実施した。１時間目では、「くいしんぼうのラップ」を演奏してみることで、言葉にリズムがあることを体感した。次に、絵本「言葉遊びレストラン」から、気に入った「言葉遊び」を選び語感を生かしたリズムを創作した。自ら 4/4 拍子２小節のリズムを生み出すのは難しいと感じた生徒もいたが、近くの生徒同士で確認し合うことで自信をもつことができたようだった。２時間目では４人のグループを作り、前時に創作したリズムを持ち寄り、組み合わせて「重なり、反復、変化、対照」の構成に気をつけて４声のリズムアンサンブルを創作した。ここでは、4/4 拍子 16 小節のアンサンブルを課題としたが、４人がじっくりと互いの創作したリズムを確認し、条件を考えて意見を出し合いながら創作していた。始めのうちはなかなか進度が上がらなかったが、手をたたいてリズムを取ったり、歌ったりすることで進められるようになった。また、２小節をそのままではなく言葉のリズムで切り取ってよいことをアドバイスすると、よりスムーズに進んだ。３時間目では、創作したリズムアンサンブルを手拍子で発表した。相互鑑賞し、互いの音楽の良いところを伝え合った。

(4) 実践のまとめ

今回の実践は、リズム創作を通して身の回りにある言葉が音楽となる面白さを味わいながら、自分のリズムの選択や他の人との組み合わせを考えることで、構成上の特徴を捉えることができた。また、４声のアンサンブルにしたことで４人の対話も生まれ、主体的・協働的な音楽学習が実現できたといえる。

## ６　研究のまとめ

(1) 成果

授業実践の前に実施したアンケートでは、学習内容の中で好むものに「創作」を選んだものは 0%であった。また、創作の学習に対する「不安がある」生徒は 60.7%を占めた。反面、「不安がない」と回答した生徒が 39.3%いるのでグループを上手に組むことで、不安を軽減し楽しく活動できるように工夫した。その結果、事後のアンケートでは「不安がない」と回答した生徒は、93.7%と 54.4%の上昇がみられた。また、好むものに「創作」と答えた生徒は 18.7%となった。生徒の感想に「楽しかった」や「同じ言葉を選んでもリズムが違うと感じ方が変わる」「また違う言葉でつくってみたい」等の記述が見られた。このことから、グループ作りの有効性と協働的な学習の展開が、「みとめあう力」と「みいだす力」の向上に役立ったといえる。

(2) 課題

今回の研究は、４つの基礎的・汎用的能力の向上を目指すものであったが、「みつめる力（自己理解・自己管理能力）」と「みとおす力（キャリアプランニング能力）」については、今年度の実践が少なかった。「みとめあう力」と「みいだす力」の向上を継続し、来年度はさらに器楽学習で到達目標と学習時間を提示し、自ら練習計画を立て実践させることで不足した２つの力の向上を目指していきたい。

# 美術科

## １　教科研究主題

多様な考えや価値を認め合い、より深く作品の良さ、美しさを
感じ味わう鑑賞教育の工夫
～人間関係形成・社会形成能力の向上を目指して～

## ２　主題設定について

(1) 全体研究主題（キャリア教育）との関連から

キャリア教育を通して育てる基礎的、汎用的能力の一つである「人間関係形成・社会形成能力」とは、多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聞いて自分の考えを正確に伝えることができる、であり、美術では、感じ取った作品の良さや美しさなどの価値について、根拠を明らかにして自分の考えを述べたり、生徒同士で批評したりして、自分の気付かなかった作品の良さを発見することである。これは緑町中学校の４つのみの中の「認め合う力」にあたると考えた。

(2) 生徒の実態

５月に行ったアンケート調査では、「作品に対する友達の意見を聞き、自分の見方や感じ方の幅を広げようとしている」では、89%の生徒が「いつもしている、時々している」と回答し、「作品を鑑賞するとき、友達の意見を聞き、自分一人では気付かなかった価値に気付くことができる」では、92%の生徒が「いつもしている、時々している」と回答している。多くの生徒が鑑賞の際に、話合い活動を通して友達の意見をよく聞き、自分と違う価値観に気付き、自分の見方や感じ方の幅を広げていることがわかる。

## ３　研究の目的

(1) パブリックアートの授業を通して、生活中で、意識しないで目にしている芸術作品が多くあることを理解し、普段から意識して地域の芸術作品に関心をもつ生徒を育てることを目的とする。

(2) 話合い活動を通して、自分と違う価値に気付き、いろいろな考え方や感じ方を受け入れる力を育てることを目的とする。

## ４　研究内容

(1) 研究の目的(1)に関して

中学校の美術の授業は年間で１年生が45時間、２，３年生が35時間であり、50分授業の一コマの中の準備、片付けを除いた制作時間は 40 分に満たない。年間の作品制作は２～３点が精いっぱいの現状である。しかし、中学校を卒業してからの長い人生の中で、どれだけの生徒がものを作り出す仕事につくのかと考えると、明らかにものを使う側に立つ人が多いと考える。卒業後の人生の中で絵画や彫刻、陶芸などを制作する機会は少ないであろう。ものを作る工程を知ったり、根気よく制作したりしていく態度を養うことは必要なことであるが、多くの人の場合、長い人生の中で美術を取り入れる方法としては鑑賞が最も適していると考える。鑑賞の授業を通して、展覧会を観に行ったり、部屋に絵や置物を飾ったりすることができる気持ちを育てることが大切であると考える。

パブリックアートの授業では、芸術作品は美術館にあり、触ってはいけないものと思っている生徒に、普段意識しないで街で目にしている芸術作品が多くあることを知らせる。それらは、パブリックスペースにあり、触ることも可能な作品が多い。美術館に行かなくても、街の中に芸術作品があるということを知り、普段から関心をもって街で見つけて、鑑賞してほしい。

鑑賞の内容も、自分の住んでいる地域と関係した作品など、興味をもちやすく親しみやすいものから題材を選ぶことによって、鑑賞を面白く感じ、より興味をもって取り組み、印象に残るものにすることができると考える。

(2) 研究の目的(2)に関して

鑑賞学習では、まず自分で作品を鑑賞し、発見したことや感じたことを整理しまとめる。その後、班の中で互いに発表し合うことで新たな考えや感じ方を知る。そして班でまとめたものを全体の前で発表することにより、また違う価値に気付くことができる。最後は個人に戻り、様々な価値感を自分の中に取り入れる。話合い活動を行うことで「人間関係形成・社会形成能力」の向上を図りたい。

## ５　研究の実践

(1) 単元名　パブリックアートについて

(2) 単元について

２年生で行うパブリックアートの授業では、あまり意識したことのなかったパブリックアートを改めて鑑賞し、身近な芸術作品に興味をもつことを目的とした。

(3) 学習の実際

はじめに２つのパブリックアートを提示し、それぞれの題名について、個々に考えさせた。［資料１，２］そのあと、なぜその題名だと思ったのかを班の中で発表し合い、他の人の価値観を共有した。班ごとに発表する場面でも、様々な捉え方があり、多様な見方や感じ方が出てきた。本当の題名を当てることが大切なことではなく、どんなことを感じて、どのように考えたかを自分の言葉で伝え、他の人がそれを自分で気付かなかった価値としてとらえることができるか、ということが大切なことである。

［資料１］　ママン

［資料２］　新宿の目

［資料３］

みどり台「LOVE」

互いの考えを共有した後、スライドを使い、市内にあるパブリックアートを紹介した。千葉市にも多くのパブリックアートがあり、身近には、みどり台の駅前に「LOVE」がある。［資料３］「LOVE」は世界的に有名なパブリックアートで、新宿やニューヨーク、台北などに展示されている。そのように有名な彫刻が身近にあることを知り、普段から興味をもって身の回りの芸術作品に触れていってほしいと伝えた。

(4) 実践のまとめ

今回の実践は、パブリックアートを通して、自分の感じ方や価値観を明確にし、他の人に伝えることや、友達の考えを聞くことによって、自分とは違う価値感に触れ、自分の見方や感じ方の幅を広げることができた。また、身近なところに有名なパブリックアートがあることを知り、より興味をもって鑑賞学習に取り組むことができた。

## ６　研究のまとめ

(1) 成果

12 月のアンケート調査では、「作品に対する友達の意見を聞き、自分の見方や感じ方の幅を広げようとしている」では、96%の生徒が「いつもしている、時々している」と回答し、７%上昇している。また、「作品の鑑賞をするとき、友達の意見を聞き、自分一人では気付かなかった価値に気付くことができる」では、94%の生徒が「いつもしている、時々している」と回答し、少しではあるが上昇している。

また、パブリックアートは美術館にある作品よりも身近に感じられたようで、授業プリントにも「『LOVE』をよく見てみようと思う。」「千葉の街を歩いたときにパブリックアートを探してみようと思う。」などの感想が多くあった。

(2) 課題

3 年間を通して、鑑賞学習を計画的に行っているが、まだ生徒の意識に定着するほどではない。時間数の少ない中ではあるが、工夫して鑑賞学習の時間を増やしていきたい。

# 保健体育科

## １　教科研究主題

一人一人が健康の保持増進のための実践力を高める授業づくり

～課題対応能力の向上を目指して～

## ２　主題について

(1) 全体研究主題（キャリア教育）との関連から

「生活を健康で活力に満ちた明るく豊かなものにする」ことを究極の目標にするキャリア教育の中の保健体育科において、キャリア教育と密接に関わる指導内容が体育分野・保健分野で多くある。また、保健体育科を通して育成する健康の保持増進のための実践力や体力は、一人一人のキャリア形成の基盤としても極めて重要である。

保健体育の学習を通して、「基礎的・汎用的能力」の育成に関連する４つの分野の指導をしていく必要がある。今年度は、これらの中から「課題対応能力」に重点を置くことで、保健体育を通したキャリア教育実践の育成の部分にあたると考えた。

(2) 生徒の実態

保健体育の学習に前向きに取り組めている生徒は全体の 90%と多い。だが、「授業中、自分の課題に応じてポイントを見つけることができていますか」という質問では、肯定的な回答は全体の 75%であった。また、「保健体育の学習中、仲間に対してアドバイスや支援を積極的に行えていますか」という項目に対して「している・まあしている」と回答した生徒は全体の 79%であった。

これらのことから、普段の授業から話合いやペア活動を行っていても、仲間の意見を聞いた時点でそれ以上考えが深まっていないことがわかる。今年度は、自分の考えだけではなく、他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聴いて自分の課題と向き合い、技能や考えを改善できるきっかけになるように発展させていく必要があると感じる。

## ３　研究の目標

保健体育科の学習場面で、健康の保持増進に対して、自ら主体的に課題を見つけることができる。

## ４　研究内容

体育分野・保健分野それぞれの授業では、教師がその日の授業の学習目標を決めて展開することが多い。各単元の最終目標を決め、授業を進めていきながら、その中から自らの課題を発見し、改善できるか検証をする。

## ５　研究の実践

(1) 単元名「健康な生活と疾病の予防」

(2) 単元について

健康な生活を送るためには、食事・運動・休養及び睡眠の４本柱が大切である。中学生は心身ともに急速な発育発達の時期にあり、偏った栄養摂取や生活リズムの乱れが健康に大きく影響してくる。そのため、生徒が望ましい食生活を学習し、そして自らの健康を適切に管理し、さらに改善していく思考力・判断力を身に付けることは生涯にわたって健康で生き生きとした生活を送るために大変重要である。

生活習慣病は、日本人の死亡原因となっている病気の上位に含まれていることから、それぞれの病気の説明と、その原因をしっかり理解する必要がある。今の自分の生活のスタイルが、危険でないかを省みる機会を設け、今後の改善につなげていきたい。

喫煙については、たばこの煙の中にはニコチン、タール及び一酸化炭素などの有害物質が含まれていること、それらの作用により、毛細血管の収縮、心臓への負担、運動能力の低下など様々な急性影響が現れること、また、常習的な喫煙により、が

んや心臓病など様々な疾病を起こしやすくなることを理解できるようにしたい。特に、未成年者の喫煙については、身体に大きな影響を及ぼし、ニコチンの作用などにより依存症になりやすいことも理解できるようにしたい。

飲酒によって脳が麻痺する状態や肝臓が病変することは、普段の生活では目にすることができない。酒の主成分は、アルコールであり、中枢神経の働きを低下させ、思考力や自制心を低下させたり運動障害を起こしたりすることや一気飲みなど急激に大量の飲酒をすると急性中毒を起こし意識障害や死に至ることを理解させたい。

(3) 学習の実際

授業では、生活習慣病が体に及ぼす影響について教科書だけでなくタブレットを使用して個人で調べる時間を設けた。単元の終わりに発表スライドを作成し、全体の前で発表する形式をとった。

一人一人が各分野で興味のもった課題について調べている様子があった。授業のまとめとして、グループで調べた内容の共有をするときに、各分野での課題だけでなく、場合によっては個人にとって有益になる情報もあることをグループの仲間に伝えている場面もあった。

(4) 実践のまとめ

授業後の振り返りでは、「年齢を重ねても、健康でいることはとても大切であることが改めてわかった」や「他の発表を聞いて、飲酒そのものがダメなわけではなく、適度な摂取であれば心の健康を保てることを知れた。自分も将来そうしたい」という意見などが挙げている生徒もいた。これまで生活してきた中で、イメージでしかなかったことを自分の将来に置き換え、適切な行動選択を考えるきっかけになったということがわかった。

## ６　研究のまとめ

(1) 成果

令和５年１月に行った調査では、「自分の課題に応じてポイントを見つけることができていますか」という項目に対して、６月に行ったときと比べ、９％増加した。また、「仲間に対してアドバイスや支援を積極的に行えていますか」という項目では、５％増加した。これらのことから、自分の課題に対しては、改善すべきポイントを理解しようとする生徒が増えた。

(2) 課題

一人一人が課題に対して向き合おうとする姿勢は見られたが、「自分の課題に応じてポイントを見つけることができていますか。」の項目で「あまりできていない、できていない」と回答した生徒が16％いた。実践を行った保健分野では課題に対して向き合うことができる生徒が多い反面、実技分野になるとどうしても苦手な生徒は、課題に向き合おうとする姿勢が保健分野とは違っていた生徒が各学年数名いた。そのような生徒への声掛けなど支援をしていかなければならないと感じる。

今後は、体育分野でも研究実践の機会を設けていきたい。スポーツは、「する・みる・ささえる」ことで一人一人がその価値を知ることができるものである。各競技のゲームに参加するだけでなく、多角的にスポーツと関わる場面を作っていきたい。そこから、個人の課題やチームの課題等を発見することもできるので苦手意識のある生徒も積極的に参加できる場面を作る必要がある。

来年度も継続して「課題対応能力」を保健体育科として、どのように身に付けていくことができるかを研究していきたい。

# 技術・家庭科

## １　教科研究主題

### 技術・家庭科におけるキャリア教育の在り方

～協働活動を通した課題解決能力の育成～

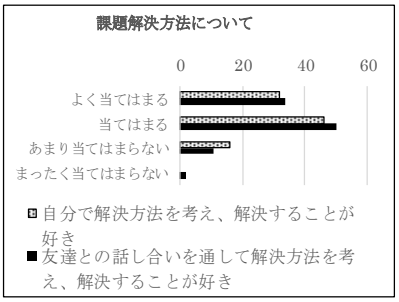
２　主題について

⑴ 全体研究主題（キャリア教育）との関連から

技術・家庭科部会では、キャリア教育と教科との結びつきを考えたところ、他者との協働活動を通して、多様な考え方に気付き、生活を豊かにする生徒の育成が図れると考えた。今年度は、キャリア教育における基礎的・汎用的能力の１つにある課題対応能力の様々な課題を発見・分析し、適切な計画を立ててその課題を処理し、解決することができる力を育むことを目標とした。昨年度は、社会や家庭の中で、他者の考えや立場を理解し、他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成しようとする能力の育成について研究した。協働活動の中で様々な情報を取捨選択し、生活や社会で必要な力を見出すため将来設計を見出す力を養うことができた。今年度は、これまで培った協働活動を生かし、社会や家庭でより豊かに営むための様々な課題に主体的に取り組むための能力を育成したいと考えた。

⑵ 生徒の実態

研究を行うにあたり、10 月に１学年 130 名に意識調査を実施した。「１．生活の課題に対し自分で解決方法を考え行動する。」の問いに対して、「よくあてはまる」「あてはまる」と答えた生徒が合計 72％であった。「２．生活の課題に友達と話合いを通して解決方法を考え行動する。」の問いに対しては、「よくあてはまる」「あてはまる」と答えた生徒が合計 89％であった。【資料１】




周りとの良好な協力関係を生かし、生徒の知識や思考を広めたり、違う考えを知ることで最適な判断をする力を養えると考えた。

３　研究の目標

他者との協働活動を通して、多様な考え方に気付くことで、今後の生活をより豊かにしようとする課題解決能力をもった生徒の育成を目標とする。

４　研究内容

⑴ 原因や課題を見つけ、その問題を解決しようとする態度を育てる。技術の適切な評価・活用する力を育成する。この２つを意識した教材の精選と開発を行う。

⑵ 協働活動を通して、多様な考え方を知ることにより思考を深めることができる学習内容の工夫を行う。

５　研究の実践

【技術分野】

（１）単元名「 情報の技術」

（２）単元について

情報教育の導入として、生活や社会でよりよく情報や情報機器を扱うためにはどうするべきか、また自分だけではなく、他者も同じように豊かなものにするためにはどうするべきかを考えさせたい。そのためにデジタル・シティズンシップに基づき、課題の把握、課題の追求、まとめと指導の展開を工夫した。本授業で扱う課題としては、タブレットのよりよい使い方について扱うこととした。ただルールに即し、扱うのではなく、自分や他者にとってよりよく使うためにどうするべきか、またそれを達成するにあたってどのようなことに気を付けるべきか、生徒が主体的に取り組める学習としたい。

⑴ 【家庭分野】単元名「持続可能な衣生活」

⑵ 単元について

持続可能な衣生活は世界的な喫緊の課題である。本時は古着のリサイクルとアパレル業界の新しい動きについて、協力して調査し、発表し合うことで情報や課題を共有する。その後前述の課題について学ぶことにより、エシカルな購入と消費について考えさせる。

(3) 学習の実際

【技術分野】

1 年生の授業で実施した。生徒への実態調査を行い、情報セキュリティと情報モラルの学習の前段のガイダンスで授業を行った。市教研の公開授業として実施し、様々な意見をいただき学習の理解を深めることにつながった。

展開は、身近になったタブレットの問題点や使用にあたっての不便なところを共有し、班ごとに改善策を考え共有した。全体で問題の解決方法を述べ合い、多角的な視点で対応方法があることを知った。情報機器の使い方のルールなどを「守らないといけない」、「あぶない」というだけの考えから、自分の目的を達成するためにはどのように適切に使えばよいか、さらに周りの人も安心、安全に使うためにはどのような考えが必要かという思考を深めることができた。まとめのワークシートの記述からも「自分から危険を避け、SNS を活用しなければならない」、「今回の学習を通して、便利さと安全性の両立を考えたい」など前向きな意見が多くみられた。

最後に、身を守る情報セキュリティの「プラス面」、「マイナス面」を考え、その必要性や適切な利用法について理解を深めることができた。

【家庭分野】

調査内容をグラフなどを使い分かりやすくまとめて、グループで協力して発表した。生徒も初めて知った内容がほとんどで、生き生きと発表していた。その後、製作の課題(児童労働、環境汚染など)についての学びを入れた。その結果、購入時の判断や処分でできることについて具体的な記述がみられた。

(4) 実践のまとめ

【技術分野】

事前の調査では、タブレットのスプレッドシートを使い、リアルタイムで他者の意見を共有することができた。また、本研究のテーマでもある「協働活動」を学習に適切に生かすことができた。講師や参加された教員の意見としては、「デジタル・シティズンシップ」の考え方は、道徳にあたるのではないか、技術分野では、生活を豊かにする「機能」や「サービス」を活用することを重点に置くべきでは、などがあった。

【家庭分野】

知識や意識が深まった。改善への取組の後に世界的な課題を視聴することによって、悲観的になりすぎることなく「自分たちでできること」を考えて実践できていた。しかし、時間がかかり、被服製作の時間にしわ寄せがいってしまった。指導主事からも全体の時間配分についてのご指導をいただいた。

## ６　研究のまとめ

(1) 成果

【技術分野】

押しつけの学習ではなく、いろいろな考えの基に主体的に判断し最適解を見出す学習につながった。

【家庭分野】

消費者としての意識が高まった。衣服やリネンの修理の取組８０%、リサイクルボックス活用約２０%、購入時の選択２%。バッグ製作時の、古着の活用が昨年度より８倍に増えた。このことから生活の実践について効果があることも分かった。

(2) 課題

自分で考えを深める学習と他者の意見を取り入れ知見を広める学習をしっかり精選し、効率的な教育計画や評価について研究を進める必要があると感じた。また、製作などの時間が確保できるように全体の時間を見直して、効果的な題材の精選と時間配分の組立てが必要である。

# 英語科

## １　教科研究主題

キャリアプランニング能力の向上を図る言語活動の工夫

～ライティング活動を通して～

## ２　主題について

(1) 全体研究主題（キャリア教育）との関連から

外国語（英語）はコミュニケーションを図るための一つの手段であり、英語を活用することは、必然的にコミュニケーション能力（みとめあう力）を高めることになる。またコミュニケーションを図ることで、自他の理解の能力（みつめる力）につながっていくものである。今年度は、英語を通して様々な題材に触れ、バランスよく「４つのみ」を養う活動を行いながら、特にみとおす力に重点を置いて指導を行いたいと考える。英語科では、これからの国際社会に生きる日本人として、他国や他地域の言語や文化に対する理解を深め、世界の人々と協調し、国際交流などを積極的に行うことができる生徒を育成する観点から、他者とのコミュニケーションを通して、自己の在り方や生き方を考えることができる生徒を育てたいと考えた。

(2) 生徒の実態

実態調査の結果より、本校の生徒は95%以上が英語の学習が自分にとって大切だと考えている。また英語の授業に積極的に参加している生徒の割合がどの学年も９割を超えていることから、英語学習に対する意欲が高いといえる。

近年まで「話すこと」の指導に重点を置いてきた本校では、「書くこと」の能力が乏しい結果が顕著に表れている。例えば、「自分の意見や感想を英語で書くことができる。」と肯定的な回答をした生徒は49.7%と５割にも満たない。また「場面に応じて適切にどの表現を使えばいいかを判断し、英文を書くことができる。」についても、肯定的な回答は63.2%と低い傾向が表れている。

以上のことから、バランスのとれた４技能５領域の指導を継続しながらも、身近な題材を通して自分の意見や感想などをその場面に応じて適切に書いて表現する力（みとおす力）を育成したい。

## ３　研究の目標

教科書の題材など身近な内容や場面を設定し、学習過程の中で書いて表現する言語活動を取り入れることで、それらの内容や場面に応じた適切な英文および自分の意見や感想を書いて表現する力（みとおす力）を育成する。

## ４　研究内容

(1) 教科書の題材を通して、その内容を自分の言葉で表現したり、ペアで共有し合ったりすることで、表現の幅を広げる授業を展開する。

(2) 帯活動の時間を有効活用し、設定された場面に応じて文法だけでなく構成にも意識を向けながら自分の言葉で英文をまとめる授業を展開する。

## ５　研究の実践

＜２学年＞

(1) 単元名「PROGRAM4 High-Tech Nature」

(2) 単元について

本単元は生物模倣（バイオミミクリー）に関する身近な例を題材に、比較級、最上級、同等比較（as～as…）を扱っている。単元末では「書くこと」として、本文 Think３の内容を Retell（再話）した後、本文の要約を書く活動を設定した。「書くこと」だけに時間を要するのは難しいため、必要な情報を「読むこと」によって情報を収集・整理し、「話すこと」（やりとり）を通じてペアと内容を確かめられるよう構成し、４技能の活動を通して書く活動に取り組めるようにした。

(3) 学習の実際

＜授業展開＞（概略）

①Q&A で本文の内容理解を確認する。

②Read & Look up を行う。（個人→ペア）
③Retell で本文の内容をまとめて伝える。（ペア）
④タブレットの[質問]機能で課題を配付し、５～６文で Think３の本文の要約を作る。
⑤要約を見合い、相互評価する。
(4) 実践のまとめ

「読んだ文について自分の言葉で要約文を書くことができる」という質問に対し、「そう思う」は 14.4％→15%、「まあまあそう思う」は 42.4%→41.6%とほぼ横ばいの結果になった。教科書本文の内容についてまとめる活動を年間で繰り返し行ったものの、約 40%程度の生徒が難しさを感じていることがわかった。本文の内容を十分に反映した英文を書くことできているものが多い一方で、本文の文章をそのまま抜き出してしまう生徒も多く、理解したことを「自分の言葉」に言い換えることに課題がみられた。派生語や類義語で幅を広げ、様々な表現が身に付くよう指導していきたい。

＜３学年＞
(1) 帯活動「Writing Challenge」
(2) 活動について

５月に実施した実態調査から、３学年の生徒は「自分の意見や感想を書く」「場面に応じて適切にどの表現を使えばいいかを判断し、英文を書く」という活動に苦手意識をもっていることがわかった。そこで、単語や熟語を書く活動や、授業の中で学習した文法を使用して短い文を書くといった基本的な活動だけでなく、自分の意見や感想を書く活動や、文法項目を提示せず場面からどういった表現を使えばいいかを生徒自身で判断して書く活動に取り組むようにした。

ある程度まとまりのある文を書く際には、ルーブリックを活用して評価を行った。それによって、生徒は目的意識をもって課題に取り組むことができるようになった。しかし、新出文法の使用に偏ってしまい、自分でどの文法を使うかを場面から判断して表現する力が身に付いていないと感じた。そこで Writing Challenge を帯活動で行うことにした。

(3) 学習の実際

Writing Challenge 実施の方法（概略）
①５分間で問題文を読み、構成を考え、英文を書き、推敲をし、書き直しを行う。
②タブレットを活用し、文法チェックなど、自分でリライトを行う。
③振り返りを行う。
④提出→ALT によるチェック
(4) 実践のまとめ

Writing Challenge の取組によって、「自分の意見や感想を英語で書くことができる。」という質問に対して肯定的な回答をした生徒が 40.2%→67.5%と増えた。最初は書くことに対して消極的だった生徒も、繰り返し課題に取り組むことによって、少しずつ書く活動に取り組むことができるようになった。

## ６　研究のまとめ

(1) 成果

実態調査の結果より、「自分の意見や感想を英語で書くことができる。」と肯定的な回答をした生徒は 58.2％と 8.5％増加した。また「場面に応じて適切にどの表現を使えばいいかを判断し、英文を書くことができる。」についても、肯定的な回答が 67.4％と 4.2％増加した。３学年の実践結果でも示された通り、全体的に書いて表現することに消極的だった生徒の数が減っている結果となった。

(2) 課題

①現状の本校英語科では各学年の実態に即して学習方法および指導を行っているため、今後は１学年～３学年までのライティング活動に系統性をもたせる必要があると考える。

②実態調査の中で、「与えられたテーマについて、ライティングのプロセスを意識して英文を書こうとしている。」の質問に対する肯定的な回答の伸び率が 0.4%（82.2%→82.6%）と極端に低かった。英文が書かれていれば良いという考え方を改め、来年度からはよりプロセスや構成を意識させた指導が必要であると考える。

# 道　徳　科

## １　教科研究主題

自己を見つめ、他人を理解し、将来を見通した道徳的実践力の育成

## ２　主題について

(1) 全体研究主題（キャリア教育）との関連から

「中学校学習指導要領解説　特別の教科　道徳編」において、道徳教育の目標を達成するために指導すべき内容項目を以下の四つの視点に分けて示している。

A 主として自分自身に関すること
B 主として人との関わりに関すること
C 主として集団や社会との関わりに関すること
D 主として生命や自然,崇高なものとの関わりに関すること

今年度本校では、道徳の四つの視点のうちA～Cとキャリア教育における基礎的・汎用的能力との関連性を［資料１］のように考えた。

| |
|---|
| A 主として自分自身に関すること<br>→自己理解・自己管理能力<br>B 主として人との関わりに関すること<br>→人間関係形成・社会形成能力<br>C 主として集団や社会との関わりに関すること<br>→キャリアプランニング能力 |

［資料１］道徳の四つの視点とキャリア教育における基礎的・汎用的能力との関わり

道徳的実践力を身に付けるためには、自己を見つめ、他人を理解すること、そして将来を見通すことが必要だと考え主題を設定した。

(2) 生徒の実態

昨年度も同じ研究主題で取り組み、「自己理解・自己管理能力」と「人間関係形成・社会形成能力」「キャリアプランニング能力」に関する質問項目に関して９割以上の生徒が高い意識をもっていることが分かっている。しかし、頭では分かっていても、自己表現力やコミュニケーション能力が足らず、互いの気持ちをうまく伝えたり、受け取ったりするなどの人間関係づくりが上手にできない場面が見られる。

## ３　研究の目標

(1) 生徒が、自らの考えをもとに意見交換することで、円滑な人間関係づくりのきっかけとなり、考えを深めることにつながることを解明する。

(2) 教師が、道徳における指導すべき内容項目の四つの視点を意識し指導することが、生徒の道徳に対する意識や意欲を向上させ、キャリア教育における基礎的・汎用的能力を育成することにつながることを解明する。

## ４　研究内容

(1) 研究の目標(1)に関して

円滑な人間関係づくりを行うために、［資料２］にある活動を意識して授業を行う。生徒のまとめをもとに授業の中での、意識の変容を読み取る。

| |
|---|
| ①　個で考える時間を取り、自らの意見を記入する。<br>②　他者と意見交換することで、自らの意見を深める。 |

［資料２］人間関係づくりのために授業で取り入れた活動

(2) 研究の目標(2)に関して

道徳の授業において、四つの視点は偏りなく行う。また、生徒に多様な道徳的価値観を味わわせるため、学年職員でローテーションを組み、授業を行う。年度末に意識調査を行い、意識の変容を読み取る。

## ５　研究の実践

(1) 教材名「役に立つことができるかな」

(2) 教材について

本教材は、道徳の四つの視点のうち、C「主として集団や社会との関わりに関すること」の勤労に関する中学１年生の内容である。中学１年生の主人公が「職場体験」をもとに、生徒の目線で感じた働くことへの思いを綴ったものである。本文では、体験で得たことや仕事の価値に気付いた主人公の心情を追いながら、生徒が働くことの尊さについて考えを深められる教材である。

(3) 学習の実際

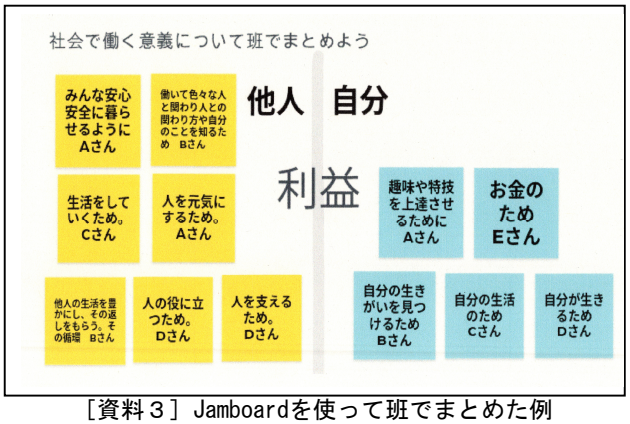
［資料２］にある活動を取り入れて授業を行った。（［資料２］を参照）

・①の活動…「社会で働く意義とは何だろう」について個人で考え、道徳ノートに記入させた。

・②の活動…「社会で働く意義について班でまとめよう」と投げかけ、５～６人の班で意見を交換し、Jamboard を使ってそれぞれの意見をまとめた。最後に、班毎に Jamboard を大型テレビに映し、まとめたことを発表し、振り返りを行った。

(4) 実践のまとめ

「社会で働く意義とは何だろう」という課題について、個人で考える時間をとった。自分たちが経験したことのないことについて考えるため、なかなかイメージがわかない生徒もいた。個人で考えた際、「お金を稼ぐため」「自分が生きるため」などの自分のことだけについて考えていた生徒が、グループ活動を通して他人の利益を考え、考えを広げることができた。（［資料３］参照）




［資料３］Jamboardを使って班でまとめた例

## ６　研究のまとめ

(1) 成果

研究の目標(1)を解明するために、今年度は Google アプリの Jamboard を使い、意見交換を行った。自分の意見を Jamboard の付箋に記入し、それぞれの意見をもとに班としての考えを１つのシートにまとめた。授業後の生徒の振り返りでは、「自分にはない考えがあった。」「いつか同じような状況になったときに、このシートを振り返れば乗り越えられるかも」という感想があった。道徳において他者との意見を交換することは重要であり、意見交換をもとに班でまとめを行うことは考えを深めることにつながることが分かった。

研究の目標 (2)においては、１年生 125 人の生徒に意識調査を行った。［資料４］にある意識調査では、９割程の生徒が肯定的な考えであることが分かった。資料には載せていないが、すべての質問項目において、４月から２月まででどれくらい意識が変わったのかを確認すると、ほぼ全員が意識するようになったと回答している。これは、キャリア教育における基礎的・汎用的能力と関わりのある質問内容のため、道徳とキャリア教育との関連性は大きいことがわかる。

また、［資料４］の【質問５】に関して生徒の理由を答えさせたところ、「たくさんの先生方の考えを聞けるところがよい。」「考え方が広がる利点がある。」という意見があった。

(2) 課題

［資料４］の【質問３】において「できなかった」と答えた生徒の割合が他の質問項目と比べると多い。【質問３】はキャリア教育における基礎的・汎用的能力の「課題対応能力」に関する項目である。授業の中では、理解できたとしても日常生活では実行することができない生徒もいる。教材に実体験をふまえたものを取り上げて考えさせたり、ロールプレイングを取り入れたりして実行する経験を行わせていく必要がある。

【質問１】授業を通して、相手を理解し、より良い人間関係をつくることができましたか。

| できた | やろうと思っている | できなかった | やろうと思わない |
|---|---|---|---|
| 57% | 39% | 1% | 3% |

【質問２】道徳の授業を受けて、学んだことをあなた自身に置き換え、生活に生かすことができましたか。

| できた | やろうと思っている | できなかった | やろうと思わない |
|---|---|---|---|
| 51% | 43% | 6% | 0% |

【質問３】道徳の授業を受けて、日常生活や今後出会うであろう様々な場面で、学んだことを実践することができましたか。

| できた | やろうと思っている | できなかった | やろうと思わない |
|---|---|---|---|
| 39% | 49% | 12% | 0% |

【質問４】道徳の授業を受けて、この先の人生でどのように生きるべきかを考えることができましたか。

| できた | やろうと思っている | できなかった | やろうと思わない |
|---|---|---|---|
| 64% | 32% | 3% | 1% |

【質問５】ローテーション道徳についてどのように思いますか。

| 良い | まあ良い | あまり良くない | 良くない |
|---|---|---|---|
| 69% | 28% | 2% | 1% |

［資料４］生徒の意識調査の結果

# 特別活動

## １　教科研究主題

主体的に社会における自己の在り方を考えられる生徒の育成

～「自己理解・自己管理能力」と「課題対応能力」の向上を目指して～

## ２　主題について

(1) 全体研究主題（キャリア教育）との関連から

日々目まぐるしく変化する社会の中で、生徒には、自己の在り方を考え、新しい未知の課題に試行錯誤しながら対応する力が求められる。そのような今日の社会や教育的課題を踏まえ、本校では学校教育における望ましい集団活動や体験的な活動を通して、実際の社会で生きて働く社会性を身に付け、生徒の人間関係形成能力の育成を図るための実践を行ってきた。学級活動・生徒会活動・学校行事では、学んだことを人生や社会での在り方と結び付けて深く理解したり、これからの時代に求められる資質･能力を意識させたりするなど、生涯にわたって自ら学び続け、現代社会を「生き抜く」生徒の育成を図っている。

本校の特別活動では、生徒自身が自己の在り方を見つめる「自己理解・自己管理能力」と、どこに課題があるかを見い出し､解決しようとする｢課題対応能力」に重点を置いた。

(2) 生徒の実態

本校の生徒は、学校行事・生徒会活動共に活発に取り組んでいる。昨年度末の意識調査では､｢自分から役割や仕事を見つけたり、周囲の力と合わせて行動しようとしたりしているか」に対して肯定的な意見は 90%を超えており､主体的に活動をして､友人と協力する意識が高いことがわかった。しかし、昨年度の避難訓練では、災害時、自ら住む地域という社会に、自分は何ができるのかを考えたり、それを学校や家庭・地域と共有したりしていくことなどが、課題に挙がった。

## ３　研究の目標

(1) 日頃の活動を通して、自己の良さや課題を見出す取組を行い、「集団や社会の形成者としての見方・考え方」を鍛え、資質・能力の育成を図る。

(2) 学校行事において、事前と事後の意識の変容が分かるポートフォリオの工夫を行う。

## ４　研究内容

(1) 研究の目標(1)に関して

振り返りを通して自己について考えを深め、他者と関わり合い、互いの良さや課題を発見し合う活動を通して、自己理解や自己管理能力、課題対応能力の向上を目指した。

今年度、１学年では、互いに認め合える学級の形成を目指して､｢ギフト～色のプレゼント～」という活動を行った。友達の良さや個性を色で表現することや、友達から自分の色を表現してもらうことで、より良い人間関係形成に必要な資質・能力の育成を図った。

(2) 研究の目標(2)に関して

今年度は避難訓練の事前・事後にポートフォリオを作成し、改善を図った。その他の行事や活動においても、学校だけでなく、自らが生活する地域に対して自分が何をできるかを考え行動できるような経験を積み､それらを周囲の人と話し合い、想いを共有していくことが本校の生徒に求められるだろう｡その他､体育祭や合唱コンクールなど、様々な学校行事において､｢見通し」と「振り返り」を意識したポートフォリオの作成や話合い活動を行った。

## ５　研究の実践

(1) 単元名「ギフト ～≪色≫のプレゼント～」

(2) 単元について

中学生の時期は、思春期になり、身体やものの見方・考え方など、様々な面で違いが表れてくる時期である。そのために、自分の考えや立場に固執し、友人間に意見の対立や摩擦が生じることも少なくない。一方で、同調過剰の傾向も生じやすい。異質排他、同調過剰は、時としていじめのような問題に発展することもある。

このように非常に多感な中学生にとって、他者と関わり合う中でこそ、自らのより良い個性の確立につながると考えられる。本単元では、自分や友達の個性を「色」で表現し、伝え合うことで個性の伸長やより良い人間関係形成を図った。

(3) 学習の実際

授業の展開前段では、「私のイメージは何色？」というテーマで、グループの仲間の個性を色にたとえる活動を行った。実際に色鉛筆を使い、きれいに彩られたワークシートが自分の手元に戻ってくると、生徒たちの顔はほころんでいた。見知った友人の良さや個性を考え、色で表現するという活動は、生徒たちにとってかなり新鮮だったようだ。

授業後の振り返りの記述からは、「様々な色で表現されていてうれしかった」「みんな同じ色（で表現されている）なのにみんな理由が違うので面白かった」など、多種多様な感想がみられた。

(4) 実践のまとめ

今回の実践では、「色のプレゼント」を通して、自分や仲間の個性を肯定的に捉え、「自他を尊重する」意識の醸成に寄与することができた。「友達から色をプレゼントされる体験」から、自己の新たな一面に気づき、メタ認知につながったといえる。互いの良さや課題を発見し合うことが、自己理解や自己管理能力、課題対応能力の育成につながることが分かった。

## ６　研究のまとめ

今年度、本校での特別活動の取組の成果と課題の分析のため、令和４年５月と令和５年１月に意識調査アンケートを行い、比較した。

(1) 成果

成果①：「生徒が自己を分析し、個性を伸長する意識の高まり」

「自分をみつめ、自分の良いところを伸ばそうと努力しているか」に対して、５月と１月のアンケートを比較すると、「とてもそう思う」の割合が38%から 42%に上昇していることが分かった。ただし、まだまだ変化はわずかであり、今後も自己を振り返る機会や方法等について、更なる工夫が求められる。

成果②：「学級への所属感や有用感の実感と向上」

１月のアンケートにおいて、「日々の生活には、みんな支え合いで成り立っていることを理解し感謝することができているか」に対して、64.1%が「とてもそう思う」と回答した。５月と比較すると、およそ 10%の向上である。今年度は、日々の学活だけでなく、生徒会活動や学校行事においても「友達の良さを見つける」など、他者と関わり合うポートフォリオの実践を行った。今後は、それぞれの取組と意識調査の結果との関連性も充分に調べていく必要がある。

(2) 課題

来年度以降の本校の課題として挙げられるのは、「課題に向き合う姿勢、課題対応能力の更なる向上」である。今年度のアンケートを振り返ると、「今までの経験をもとに、新たな課題に直面したとき、どのような行動ができるかを考え選択しようとしているか」に対して、強く肯定した生徒の割合は、５月と１月のどちらとも４割弱であった。

来年度以降、更なる課題発見能力や課題対応能力の育成やそのための実践の工夫を進めていく必要があるだろう。そのためにも、引き続き生徒への意識調査を続け、本校の研究を深化させていきたい。

# 総合的な学習の時間

## １　教科研究主題

体験学習を通じて思考力・判断力・表現力を養い、

見通しをもって探究的に課題解決に臨む生徒の育成

## ２　主題について

⑴ 全体研究主題（キャリア教育）との関連から

総合的な学習の時間は、横断的・総合的な学習としての性格をもち、探究的な見方・考え方を働かせて学習することがふさわしく、そこで育成される資質・能力が、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくことに結びついていくような、教育的に価値のある諸課題であるべきとされている。そこで、職業や自己の将来に関する課題を中心として学習に取り組み、各学年を以下のとおりに位置づけた。

１年生…【視野を広げ、「学び方」の基礎を身に付ける段階】
職業を知る

２年生…【協働的に学習に取り組む中で、追及の仕方を学ぶ段階】
働くことの意義を学ぶ

３年生…【培った力を生かしながら、個人テーマを追求する段階】
将来の私を考える

⑵ 生徒の実態

生徒に行ったアンケートで「将来役に立つ学習は何だと思いますか」という質問では、総合的な学習の時間を選んだ生徒が、36％であった。この結果から、総合的な学習の時間に行っている活動が生徒のどうような力を伸ばすことにつながるのか、将来どのように役に立つのかという目標を提示することが必要だと考えた。そのために、体験的な学習の中で思考力・判断力・表現力を伸ばすこと、学校行事や学習の中で見通しをもたせることが大切だと考えた。

また、アンケートの「わからないことやもっと知りたいことがある時、自分から進んで資料や情報を収集したり、誰かに質問をしたりしているか」という質問では、肯定的な回答が 89％であった。このことから協働的な学習活動を充実させ、そこからさらに自ら課題を設定できるようにさせたい。

## ３　研究の目標

⑴ 体験的な学習を行う中で、思考力・判断力・表現力を伸ばすために新たな気付きや課題を発見させそのことをまとめさせる。

⑵ 学習の中で見通しをもたせるために既習の内容を用いて未知の問題に取り組ませる。

## ４　研究内容

⑴ 研究の目標⑴に関して

体験的な学習を行う中で、思考力・判断力・表現力を伸ばすためには、新たな気付きや課題を発見しそのことをまとめることが必要である。体験的な学習を行う中で、自分で調べたこと以外に気付くことやわかることがたくさんあると考え、そこから新たな課題を考えまとめることが思考力・判断力・表現力を伸ばすことにつながる。

⑵ 研究の目標⑵に関して

学習の中で見通しをもたせるためには２つ必要である。

１つ目は、学習の流れを伝えることである。学習していく中でどのような内容を学び、最終的にどのような力を身に付けるのか学習の始めにわかることで、見通しをもって学習に取り組める。

２つ目は、既習の内容を用いて未知の問題に取り組むことである。探究的な学習を進めていく上で、新たな課題を自分で設定したとき、その課題

を解決するためにどのような方法や手段があるかを考えるために見通しをもつことが必要である。そのために、既習の内容を用いて見通しをもつことが大切である。

## ５　研究の実践

(1) 単元名「職業学習」

(2) 単元について

職業学習は、①プレゼンテーションの練習②自分が調べたい企業の選択③質問を考える④プレゼンテーション作成⑤発表⑥お礼状の作成の流れで行った。

プレゼンテーションの練習では、NHK for school「しまった」の動画を見てプレゼンテーションの作成や発表についてどのような工夫をしたらよいか学んだ。その内容を生かして班ごとに「緑町中学校の紹介」のプレゼンテーションを検討し、作成した。また、発表した際には評価用紙を用いて発表した班の良かった点や改善したほうがよい点を記入することで発表者が自分の発表内容を振り返れるようにした。

自分が調べたい企業の選択では、10 年先のジョブノートに記載されている企業の中をタブレットで調べ、さらに深く知りたい企業を選択させた。

質問を考える場面では、企業ごとに分かれたのちどのような点を深く知りたいか班員で検討し、そのことについて質問を考えるようにした。

プレゼンテーションの作成では、①プレゼンテーションの練習で学んだことを生かしプレゼンテーションの作成と練習を行った。

発表では、実際に企業の方に来ていただき企業の方の前で発表を行った。［資料１］その後、企業の方から発表の講評をいただき、企業ごとのワークショップを行った。

お礼状の作成では、実際に話を聞いて感じたことや体験して思ったことなどを「働くこと」に織り交ぜて書き、今後の生活や将来にどう生かしていくかの決意を書いた。

また、総合的な学習の時間だけでなく、国語科で事前学習として「魅力的な提案をしよう」や道徳で「働くことについて」など教科横断的に学習した。

(3) 学習の実際

生徒は授業の中で、話合いや振り返りを行うことで改善点や課題を発見することができた。また、実際に企業の方から話を聞いたり体験をしたりすることで事前に調べた内容よりも多くのことを知ることができた。

(4) 実践のまとめ

授業を通して、プレゼンテーションの練習や教科横断的に学習した内容がプレゼンテーションの作成に生かせている場面があり、既習の内容を用いて見通しをもって取り組めていた。

新たな課題を発見しまとめることは難しそうな生徒が多くいたように感じる。

［資料１］職業学習の発表の様子

## ６　研究のまとめ

(1) 成果

生徒に行ったアンケートのなかで、「職業学習に見通しをもって取り組むことができましたか」という質問に対し、肯定的な回答をした生徒が 72%であった。このことから見通しをもって職業学習に取り組めたと考えられる。

(2) 課題

生徒に行ったアンケートのなかで、「職業学習のなかで、新たな課題を考えまとめることができましたか」という質問に対し、肯定的な回答をした生徒は 31%であった。このことから、新たな課題を見つけまとめることが今後の課題であると考えた。

# お わ り に

教 頭　岩 脇 之 俊

本校では、令和２年度、３年度と、千葉市教育委員会の指定を受けてキャリア教育について研究を行ってきましたが、今年度もその取組を継承し、引き続きキャリア教育について研究を深めることにしました。今年度の研究の特徴として、第一に、生徒にキャリア教育の目標を示すために、「基礎的・汎用的能力」を「４つの㋮」でわかりやすく表現し、それを各教科、領域で実践したことです。

人間関係形成・社会形成能力は、「㋮とめあう力」と捉え、他者と協力して学習に取り組む協働的な学びの中で育成することとしました。自己理解・自己管理能力は、「㋮つめる力」と捉え、自分の思いや考えを形成し深めるように学習過程を工夫しました。課題対応能力は「㋮いだす力」と捉え、各教科の見方・考え方を働かせる中で、見通しをもって事象を整理・分析・処理する中で育成しました。キャリアプランニング能力は、「㋮とおす力」と捉え、様々な題材に触れる中で、適切に自分の意見や感想を書く活動を重視しました。

第二の特徴として、学校行事に関して、特別活動や総合的な学習の時間の取組を基に、ポートフォリオを作成し、それをキャリアパスポートとして蓄積したことです。行事ごとに事前と事後の取組に対しての意識の変容を見とるための題材としました。

今年度でキャリア教育についての研究は一区切りとなりますが、それぞれの「基礎的・汎用的能力」の向上が見られるものの、自分自身について見つめ直したり、見通しをもって考えたりする力については、他の項目と比較すると劣っている結果となりました。課題については引き続き学校全体で意識して取り組んでいきたいと考えております。

結びに本研究を進めるにあたり、ご協力をいただいた先生方、並びに地域、保護者、関係各位の方々に感謝を申し上げます。今後とも、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いします。

**【ご指導いただいた講師の方々】**

千葉市養護教育センター　指 導 主 事　　渡 辺　千 映 子　様

**【研究同人】**

| | | | |
|---|---|---|---|
| ＜校　　長＞ | 滝　口　健　二 | | |
| ＜教　　頭＞ | 岩　脇　之　俊 | | |
| ＜教 務 主 任＞ | 加　藤　幹　規 | | |
| ＜研 究 主 任＞ | 千　葉　洋　輔 | | |
| ＜国　語　科＞ | 伊　藤　美　幸 | 佐　藤　裕　加 | 齋　藤　航　希 |
| ＜社　会　科＞ | 河　村　　賢 | 松　井　愛　美 | 今　村　　蕗 |
| ＜数　学　科＞ | 林　　秀　和 | 宮　葉　　翼 | 江　田　大　志 |
| ＜理　　科＞ | 加　藤　幹　規 | 渡　邊　智　美 | 渡　邉　啓　吾 |
| ＜音　楽　科＞ | 和　田　桂　子 | | |
| ＜美　術　科＞ | 阿　部　真　紀 | | |
| ＜保健体育科＞ | 老　田　　裕 | 鈴　木　マ　リ | |
| ＜技術・家庭科＞ | 青　木　聖　典（技術分野） | | 佐　々　聡　子（家庭分野） |
| ＜英　語　科＞ | 千　葉　洋　輔 | 片　岡　亜季子 | 堀　　佳　月 |
| ＜学 校 事 務＞ | 鶴　岡　一　江 | 坂　口　　凜 | |
| ＜養 護 教 諭＞ | 仲　西　麻衣子 | | |
| ＜学校図書館指導員＞ | 山　田　郁　実 | | |
| ＜ｽｸｰﾙｶｳﾝｾﾗｰ＞ | 小　松　佳　子 | | |
| ＜技　能　員＞ | 豊　島　孝　浩 | 千　葉　啓　介 | |

**令和４年度　研究紀要**

令和５年（２０２３年）３月発行

発行所　千葉市立緑町中学校

住　所　〒２６３－００２３

千葉市稲毛区緑町２－３－１

ＴＥＬ　０４３－２４１－４１３１

ＦＡＸ　０４３－２４４－５９４３